

タイトル	北海学園大学人文学部2021年度優秀卒業研究賞
著者	
引用	北海学園大学人文論集(73): 35-51
発行日	2022-08-31

北海学園大学人文学部 2021 年度 優秀卒業研究賞

講 評

2022 年 3 月 10 日

人文学部長 大 森 一 輝

優秀卒業研究賞を受賞されたみなさん、おめでとうございます。

新型コロナウイルスのために3年連続で発表会が行えなくなったことは大変残念ですが、プレゼンテーションがなくなっても、みなさんが優れた研究成果をまとめた事実が変わりはありません。そのことを記録に残すという意味でも、このような形で、審査委員長として、講評を述べさせていただきます。

今、世界は戦争で揺れています。人が殺されているときに、人文学に何ができるのか。古典的な問いですが、やはり、そのことを考えたいと思います。

人文学は、人間の醜さや愚かさを見つめると同時に、その可能性を見出そうとする営みです。その両方を見極める技を私たちは磨いています。今年の優秀卒業研究にも、その志がしっかりと表れています。

多少強引になるかもしれませんが、そういう観点から、個別にコメントしていきます。

言語分野では、須田莉加さんの「映画『プラダを着た悪魔』における日本語字幕にみられる特徴」が優秀賞に輝きました。字幕翻訳が何を伝え何を省略しているのかを、先行研究で提起されている分類を利用して、大変丁寧に分析した力作です。ストーリーに直接関係しない言い回しや日本では馴染みのない文化的要素は削除される傾向があることを、豊富な実例によって示すことに成功しています。つまり、字幕では、「何を話しているか」

は表現できますが、「どのような話し方をしているか」までは伝えられないのです。そのことが、登場人物や人間関係の理解にどの程度影響を及ぼしているのかは、ご本人も最後に書いているように、吹き替えとの比較によって、今後追究していくべき課題になるでしょう。元の役者の声を聞き表情を見ながら内容のエッセンスを字幕で読むのと、別の人が声を当てたセリフを全部聞くのでは、私たちの受けとめ方のどこが・どう違うのか。須田さんだけでなく、人文学部で言葉や文化について学んだみなさんには、そういうことも意識しながら、海外の映画やドラマを楽しんでももらいたいと思います。

人を憎み脅し傷つける言葉が飛び交う時代だからこそ、「語られる内容」と「語り口」の関係を考えることの重要性は、これまで以上に増えています。

文学分野からは、廣澤慎太郎さんの「サハリン先住諸民族の民話にみられる伝聞形式の由来」が優秀賞に選ばれました。樺太アイヌ語、ウイльта語、ニヅフ語の民話で多用される伝聞形式（日本語の「～だとさ」に相当）の起源を明らかにしようとした意欲的な試みです。系統・音韻・形態統語的に異なるこの3つの言語が同じ形式を持つに至ったのには2つの流れがあるという仮説を打ち立て、これまでの研究に修正を迫っています。1つは、アイヌ語と日本語（東北方言）がこの形式を共有（いずれかが借用）し、それがサハリンに持ち込まれ、樺太アイヌ語がウイльта語南部方言に影響を与えたというルート。2つ目は、もともと大陸ニヅフ語が北東ユーラシア諸言語との接触で獲得していたものが、そのままサハリンにも広がっていったというルートです。諸民族の移動・交流の実態やそれによる各言語の歴史的な変化をふまえた本格的な実証はこれからの作業になりますが、英語・ロシア語などの文献を駆使し、分析対象の言語についても例文を自ら和訳するなど、その語学力と情熱は高く評価できます。今後は、語りの形式だけでなく民話の内容にまで踏み込んで、サハリンという島で生きる諸民族がどのように重なり合う精神文化を育んできたのかが明らかにされることを期待しています。

同じ土地で／近接して暮らす人々は、衝突することがあったとしても、知らず知らずのうちに、多くのことを分かち合っているのです。

歴史分野の優秀賞は、五十嵐命さんの「肥後加藤家改易に関する一考察——改易は徳川の陰謀だったのか」になりました。豊臣秀吉の子飼いの家臣として有名な加藤清正に始まる肥後加藤家が、寛永9年（1632年）に領地を召し上げられ改易となった背景を探ったものです。明治以降に歌舞伎で広まった清正の毒殺という風説は全くの虚構であり、徳川が豊臣恩顧の大名を一掃しようとしたという見方にも裏付けはなく、改易は加藤家の側の失態が招いたことを明らかにしています。関係する史料を、その成立の経緯と信頼性に気を配りながら批判的に読み解くという、歴史研究の基本的な手続きに則って論を進めたことが、陰謀論を退けた叙述に強い説得力を持たせています。江戸時代初期の事件を扱ったものですが、事実とは異なる歴史認識がどのように作られるのか、という極めて現代的な問題にも通じる、見事な過去との対話になっていると思います。

過去についても現在についても、一人一人が情報を吟味し「自分で考える」という負荷に耐え知的な誠実さを貫くことが、現実と向き合う第一歩になります。

環境分野の優秀賞となった山崎悠斗さんの「これまでの技術革新と雇用の変化——雇用の二極化に順応するための日本教育の現状」は、AIが社会に与える影響を論じています。機械が人の仕事を奪ったり仕事の様相を変えてきた歴史を振り返ったうえで、AIが雇用の二極化を進めるだろうという予測をもとに、それに対応するためには、AIでは置換できない力（コミュニケーション能力、論理的思考力・判断力、イノベーション力）を伸ばす教育が必要であると主張しています。臨機応変に他者と接し、必要な情報を見極め、新しいものを創り出していくことは、人間の得意技なのです。コロナ禍は、「その場に人がいないとできない仕事」があることを可視化しました。その一部を「低スキルの仕事」と固定的に捉えるのではなく、そうした仕事のあり方自体を変えていく可能性も含め、格差の解消のために何ができるのかを継続して考える必要性を感じさせてくれました。

私たちは、変化に翻弄されるだけでなく、変化を生み出す主体にもなるのですから。

今年度から新設された「英語で執筆された論文」というカテゴリーでは、高橋美玖さんの“Pronunciation of [su] and [tsu] by Burmese Japanese Language Learners”が優秀賞を授与されました。ビルマ人の日本語学習者が苦手な発音を特定し、それが日本語のレベルや日本滞在歴でどのように変わるのかを実証的に調査した成果です。インターネットを使って自分で49人の被験者を確保し、音声のやり取りで独自にデータを集め分析した結果、聞き取りよりも発音のほうが多い難しいことや、日本に長く住んでいればそれを克服できるわけでは必ずしもない（日常生活でどの程度日本語を使うかによって違う）ことなど、興味深い発見を提示しています。それをビルマ人の日本語学習にどう活かすことができるのか、ビルマ語以外を母語とする日本語学習者との比較も視野に入れながら、研究を発展させてもらいたいと思います。

世界は、多様性を抱え、ときに争いを起こしながらも、紐帯を強めています。遠くの人とも日本語でつながることができ、それを英語で発信することもできる。私たちの思いは、国境を越えます。

そして、今年度の最優秀賞は、思想分野の優秀論文である高橋菜穂さんの「ギリシア神話の『パンドラの匣』のイメージの普及——女性が悪の原因とされる『パンドラ』のイメージはどのように形成されたのか」に贈られました。

古代から近代までのヨーロッパ文化の中でこの神話がどのように受容されてきたのかを各種の文献を渉猟しながら辿ることで、「匣」を開けたパンドラを諸悪の根源とするヘシオドスの伝統図式とは異なるバブリオスの解釈もあったにもかかわらず、キリスト教の教父たちがアダムとエヴァの物語とパンドラ神話を比較して論じたために女性を禍の原因とする見方が広まり、近世以降パンドラを擁護するような戯曲がいくつか現れたものの、否定的なイメージは覆らなかったことを確認しています。それでも、逆説的に言えば、そのようなイメージがあったからこそ、「パンドラ」は女性に

対する社会的な常識や偏見を問い直す批判機能を持ち得た、という指摘は、非常に刺激的です。ただし、この結論は、さらに多くの作品の分析とその影響の調査によって検証されることが待たれる、作業仮説と言うべきでしょう。後に続く研究を促す優れた論考になっています。

人文学研究の「社会的な常識や偏見を問い直す批判機能」こそ、世界をより公正でより自由な場所にするための原動力です。卒業研究を通して人文学部生がそれを実践したことを、この6人のみなさんが、それぞれの分野を代表して示してくれました。他のすべての卒業生のみなさんも、自分たちが、学問という、この長く豊かな共同作業の中にいたことを、いや、いつでも・どこにいても、学問は君たちとともにあることを忘れずに、いつまでも「学び考える人」であり続ける（そうあろうとする志を失わない）ことを、切に願います。

最優秀賞(要旨)

思想文化群

ギリシア神話の「パンドラの匣」のイメージの普及 —— 女性が悪の原因とされる「パンドラ」のイメージは どのようにして形成されたのか

高橋菜穂(1部英米文化学科 指導教員:小柳敦史)

ギリシア神話の「パンドラの匣」という語は、今日慣用句として各言語で定着している。この「パンドラの匣」の物語として最も有名なものは、ヘシオドスの『神統記』と『仕事と日』の中の短い補稿である。このヘシオドスの物語では、パンドラは人類最初の女性として描かれている。この人類最初の女性、パンドラが禍をもたらす匣を開けたことから、パンドラの神話は女性の意志の薄弱さを説いているという解釈がある。しかし、パンドラの神話の本来の意味合いを明瞭に反映していると近代の学者たちに評価されているバブリオスの説話では、匣を開ける人物は男性である。ではこのバブリオスの説話ではなく、ヘシオドスの物語がいまだに根強く「パンドラの匣」のイメージを形成しているのはなぜだろうか。この問いに答えるために本稿では、パンドラのイメージの普及と、「パンドラの匣」という語の使われ方について分析する。

第一章では、ヘシオドスという人物とヘシオドスの二大主要作品である『神統記』と『仕事と日』についてそれぞれ説明した後、この二作品におけるパンドラに関する描写について整理した。ヘシオドスは「災いをもたらすために造られた最初の女性であり、^{かめ}甕の^{ふた}蓋(ヘシオドスの物語において、パンドラが開けるものは匣ではなく甕の蓋である)を開け災いをもたらしたパンドラ」だけではなく、パンドラから生まれた女性たちもまた、人に破滅をもたらす存在であるというイメージを形作っていることが分かった。これらのヘシオドスの作品におけるパンドラと女性たちの描写から、パンドラ神話は女性の意志の薄弱さを説いているという解釈が生まれたのである。しかし、その一方でこのヘシオドスの作品においてパンドラが自

ら行動を起こしたのは甕の蓋を開けた時のみであり、この甕の蓋を開けるという行為が神々から禁止されていたかどうか、パンドラが甕の中身について知っていたかが不明である点から、パンドラの行動を女性の意志の薄弱さを説くことに繋がられないと考えることもできるため、安易にパンドラ＝原初の女性＝好奇心＝諸悪の根源という図式を成立させることはできないことを指摘した。

第二章では、バブリオスという人物と、『バブリオスによるイアンボス詩形のイソップ風寓話集』の中の「パンドラの匣」に該当する物語について説明し、ヘシオドスの説話とバブリオスの説話を比較・考察した。バブリオスの『バブリオスによるイアンボス詩形のイソップ風寓話集』は、1世紀～2世紀頃は教材として使用されたことから、識字者層全体に読まれていたと推測されるものである。バブリオスの説話には、ヘシオドスのパンドラ神話と異なる点がいくつか見られたが、その中でも特に甕（壺）を開けた者の描写に注目した。

甕（壺）を開けた者について、バブリオスはただ単に「ある男」としか述べていない。その一方で、ヘシオドスの二作品では、甕（壺）を開けた者パンドラは細かく描写がされている。識字者層全体に読まれていたと推測される『バブリオスによるイアンボス詩形のイソップ風寓話集』は、その後は忘れられてしまったものの、1844年に発見されたアトス写本によって注目を浴び、ショーペンハウアーをはじめ近代の学者に神話本来の意味を反映していると評価されている。しかし、このように評価されているバブリオスの説話は、パンドラの神話は女性の意志の薄弱さを説いているという解釈を覆すに至らず、現在に至るまで「パンドラの匣」の物語の認識がヘシオドス版に基づくものであることを指摘した。

第三章では、パンドラの神話と、「パンドラの匣」という単語がどのようにに伝播していったかを説明した。パンドラ神話の伝搬において、キリスト教の教父たちが重要な役割を担っていた。キリスト教の教父たちは、ヘブライ語聖書（旧約聖書）の『創世記』に登場する人類最初の女性エヴァとギリシア神話のパンドラを比較し、エヴァという人物またはアダムとエ

ヴァの物語の方が、パンドラという人物またはパンドラ神話よりも優れていると主張した。このようにして、アダムとエヴァの物語とパンドラ神話が比較されて論じられたことで、エヴァに原罪の責任を負わせる論調に伴って、パンドラを禍の原因として捉える見方が強まった可能性を指摘した。また、「パンドラの匣」という言い回しを広く知らしめることになったのはエラスムスの『三千の格言』である。『三千の格言』は、一時ヨーロッパでもっとも人気と影響力を持つ書物であった。この書物にはパンドラの物語が何度も登場しているが、文書内の「dolium 甕(壺)」がすべて「pyxis 匣」と表記されていた。こうして影響力のある書籍において、甕(壺)が匣に取って代わられたことで、パンドラの物語が広く知られることとなり、ほとんどすべてのヨーロッパ言語において、「パンドラの匣」という言い回しが定着していった。以上のことから、キリスト教の教父たちとエラスムスの『三千の格言』によって、パンドラを禍の原因、諸悪の根源として捉える見方と共に、「パンドラの匣」という単語が広まったことが分かった。

第四章では、慣用句として定着した「パンドラの匣」が、近代以降の演劇作品の中でどのようにして使われているのかを分析した。パンドラ＝好奇心＝諸悪の根源という図式を採らない、パンドラに対して擁護的な作品がいくつか見られるものの、やはりパンドラ＝諸悪の根源という印象は広く定着しているということを確認した。

第五章では、第一章から第四章で述べたことをまとめ、「パンドラの匣」と「パンドラ」がどのようなイメージで広まり、どのようにして使用されたのか結論を出した。「パンドラの匣」という言葉は、パンドラ＝原初的女性＝好奇心＝諸悪の根源というイメージを有することとなり、そのイメージは広く根付いているといえる。しかし、「パンドラ」は、そういったイメージを有しているからこそ、「パンドラ」を通して、社会の常識や虚偽を問い直す批判機能も持ち合わせているという結論に至った。

優秀賞（要旨）

言語文化群（言語）

映画『プラダを着た悪魔』における日本語字幕にみられる特徴

須田莉加（1 部英米文化学科 指導教員：上野誠治）

本論文は、アメリカ映画『プラダを着た悪魔』における英語のセリフと日本語字幕を比較し、文化的視点から字幕翻訳の特徴を見つけ、翻訳の過程で失われた要素を分析したものである。

字幕翻訳には字数制限や漢字制限等、厳しい制約がある。目で文字を読むスピードはセリフを耳で聞くスピードのおよそ三分の一といわれ、字幕はセリフの内容を三分の一の表現に縮めなければならない。また、観客が字幕を読む速度は、二秒で七、八字、三秒で十字、五秒で二十字と算出されており、字幕は一行十字、二行までと決まっている。使用する言葉は最も一般的な日本語と決められている中学・高校で教える国語、新聞・テレビで使われている用語に限られる。限られた字数の中にセリフの意味を忠実に、完全に盛り込もうとすると、制限漢字を使わなければならない場合も起こってくる。映画の観客はさまざまであり、文字を読む習慣を身につけていない人も大勢いる。字幕は映画のムードとセリフのニュアンスを傷つけず、その観客の誰にでも分かる文章にしなければならない。そのため、元のセリフと全く違う言葉に置き換えることもあり、セリフと字幕ではずれが生じてしまう。以上のことを踏まえ、映画『プラダを着た悪魔』における日本語字幕の特徴、失われる要素を見つけるために二つの分析を行った。

第二章では、Gottlieb (1992) と小谷 (2004) の研究を基に「字幕分類モデル」を用いて、文化的視点から字幕翻訳の特徴を分析した。「起点言語の文化重視」「対象言語の文化重視——起点言語配慮型——」「対象言語の文化重視——独自解釈型——」に分け、字幕翻訳を分類し、特徴を考察した。「対象言語の文化重視——起点言語配慮型——」に分類される要素が多く、「対象言語の文化重視——独自解釈型——」に分類される要素が少ないとい

う結果が得られた。

第三章では、Baker (2011) と保坂 (2016) の研究を基に五つの等価の枠組み「語レベル」「フレーズレベル」「文法レベル」「談話レベル」「語用論レベル」を設定し、失われた要素を分析した。コミュニケーションを円滑にするための要素が多く含まれる「談話レベル」での削除が多く見られた。また、全体としてアメリカでは馴染みのある店名や場所、ブランド名等の固有名詞、God 等の文化的要素を含む表現が日本語字幕に反映されないことが分かった。

以上二つの分析結果から、映画『プラダを着た悪魔』における日本語字幕は、コミュニケーションを円滑にするための日常的に使われる表現や文化的要素は削除される傾向にあるが、セリフの内容を忠実に訳し、ストーリーを理解することに重きを置いた字幕翻訳であると結論付けた。

言語文化群 (文学)

サハリン先住諸民族の民話にみられる伝聞形式の由来

廣澤慎太郎 (2部英米文化学科 指導教員: 森川慎也)

サハリン島の先住諸民族(アイヌ, ウイルタ, ニヴフ)が語る口頭文芸のうち、散文で語られる民話では伝聞形式が多用される。この現象は、各民族と同系の諸民族にはほとんど見られず、サハリン島諸民族文化の特異な点であると言える。本稿では、彼らの民話で多用される伝聞形式がどのような経路でサハリン島に持ち込まれたのかを考察した。

第1章では本稿では複数の言語を扱うため、煩雑化を解消することを目的として、サハリン島周辺の言語分布を図示した。

第2章では主に扱うアイヌ語, ウイルタ語, ニヴフ語の表記や言語的な特徴を示した。

第3章では本稿で扱う「伝聞」が、発話内容の事象を目撃しておらず、間接証拠性のみに基づいており、情報源には言及する必要がないモダリティであることを述べた。

第4章から第6章では各言語の伝聞形式の由来を、周辺言語との比較対

照を通して考察した。第4章では、樺太アイヌ語の伝聞形式に使用される助動詞は、他地域のアイヌ語とは意味的にも統語的にも差異を示しており、むしろ意味は日本語東北方言の伝聞形式と共通していることを明らかにした。第5章ではウイльта語の伝聞形式を扱った。まずウイльта語の伝聞形式についての先行研究の概要を紹介し、同系のナーナイ、ウルチャの民話に出現する伝聞形式は、接辞化しているウイльтаとは異なり、独立形態素によって示され、頻度においてもウイльтаほど高頻度で使用されないと指摘していることを確認した。続いて、先行研究では触れられていなかった、ウイльтаと同じくツングース語族に分類され、サハリンにも居住しているエヴェンキの民話との比較も行い、エヴェンキの民話にもウイльтаのような伝聞形式は認められないことがわかった。また、ウルチャ語の伝聞形式が北方言よりも南方言に偏って現れることも指摘した。先行研究で指摘されているアイヌ語、ニヴフ語とのイントネーションの類似性や、同系のナーナイ、ウルチャとの差異に加え、本稿で明らかになったエヴェンキとの差異や南北差を考慮し、ウイльтаの伝聞形式はアイヌ語と接触した南方言が独自に獲得したものであると論じた。第6章ではニヴフ語を扱い、大陸ニヴフ語も含むあらゆる方言群で使用されることを確認した。続いて先行研究によって、ニヴフ語とその周辺の言語において文法上の類似が指摘されていることを紹介し、ユカギール語、ツンドラ・ネネツ語の民話にも伝聞形式がみられることを述べた。以上の点を踏まえ、ニヴフ語については、北東ユーラシアの広い範囲で生じた文化接触の影響を受けた可能性が高いと考察した。

サハリン島先住諸民族の民話にみられる伝聞形式の由来について、本稿の研究結果は以下のようにまとめられる。アイヌ語がサハリン島外でこの特徴を獲得し、サハリン島定住後にはウイльта語南方言に影響を与え、この特徴を獲得させるに至った可能性が高い。ニヴフは、ユーラシア大陸北東部の広範囲な文化伝播の一端としてこの特徴を獲得した可能性がある。サハリン先住諸民族の民話にみられる伝聞形式は、アイヌとニヴフの南北2方向からもたらされた可能性が高いとの仮説を提示した。

歴史文化群

肥後加藤家改易に関する一考察——改易は徳川の陰謀だったのか

五十嵐 命（1部日本文化学科 指導教員：片岡耕平）

肥後加藤家の家祖である加藤清正は死後、熊本県を中心に病気の治癒を祈願する神や軍神として信仰を集める存在となった。清正人気は信仰とともに全国各地に広まった。さらに、歌舞伎の演目や文芸作品に取り上げられたことによって、豊臣家を守る忠臣という清正像が作られたといえる。しかし、清正が反徳川という立場であったことで殺害され、弱体化した豊臣恩顧の家である加藤家が改易に追い込まれた可能性がある。本論文では、清正に関する風説の内容、経緯に関して考察し、改易の事実がどのようなものであったか見ていく。

第一章では、本稿で使用した史料について確認した。基本史料とされる家祖加藤清正の一代記である『清正記』・『続撰清正記』の成立背景について考察し、清正時代の家臣の口述を基に書かれているものの、後世に成立していることを明らかにした。したがって、これらは補助的に用い、一次史料である『細川家記』や『時慶記』を柱に検証を進めることにした。

第二章では、『実成穠清正伝記』『清正誠忠録』・『清正記』・『続撰清正記』の清正像を取り上げた。徳川家康との二条城会見に臨む豊臣秀頼の供をする忠臣として清正が描かれている。しかし、一次史料を見ると、清正はこの会見に徳川家の縁者として出席しており、豊臣家と徳川家の対立構造は見られなかった。

第三章では「毒饅頭の清正」が説く清正の毒殺説を取り上げ、この説が虚構であったことを明らかにした。実際の死因は、脳卒中や脳溢血であったと推察される。清正は、徳川家の陰謀によって殺害されたのではなく、突発性の病気で亡くなっていたのである。

第四章では、肥後加藤家を継いだ加藤忠廣と徳川幕府との関係について考察した。二代目である忠廣の時代に、幕府との関係はさらに強化されていたようである。肥後加藤家内部で幕府主導の人事改革が行われ、先代の親族色の強い家臣団が排され、五人の家老の合議制による政務運営が始

まった。

第五章では、肥後加藤家の家臣団の主導権争いである牛方馬方騒動の経緯を追い、徳川幕府がこの騒動にどのように対応したのかを考察した。騒動の結果は、幕府の裁定により馬方派が勝利することになる。この騒動が原因で加藤家の改易が噂されたが、徳川家との深い血縁関係により救われることとなった。

第六章では、忠廣の異変、忠廣の嫡子である光廣の謀書事件から改易に至る過程を、幕府の対応に視点を据えて考察した。改易は、陰謀などと呼ぶべきものではなく、合理的な理由に基づく処分であったと考える。光廣の謀書事件に端を発して、忠廣自身の藩運営の不行跡が明るみに出たこと、あるいは許可なく忠廣の妻子を国許へ帰したことが改易処分の理由であった。

最終章では、「忠臣清正」像の起源について考察し、それが創作された4つの原因を指摘した。第一に、近代国家形成のために、主家に忠実な人物のモデルが必要であったこと。第二に、清正信仰が全国各地に広まったこと。第三に、改易にまつわる言説が特異なものであったこと。最後に、肥後加藤家の史料が散逸し、事実の検証がしにくかったことが挙げられる。

近代になって清正人気が高まり、忠臣としての清正像が大きく取り上げられ、そこから徳川家との対立構造が生まれてきたというのが、以上の考察を通しての結論である。それに伴い、改易の理由が加藤家の反徳川の姿勢にあったという風説が生まれ、さらに清正は忠臣として祭り上げられることになる。

環境文化群

これまでの技術革新と雇用の変化

— 雇用の二極化に順応するための日本教育の現状

山崎悠斗（1部英米文化学科 指導教員：柴田崇）

近年ではAIの進歩によって、機械には不可能とされてきたことが可能になってきている。例えば、自動運転技術や画像認識技術など様々な分野

で有効活用することができる。しかし、こういったAIの進歩が人間の雇用数を減少させるという懸念も存在する。それはAIによって様々なものが自動化できるようになり、人間に置き換わっていくというものである。

しかし、このような技術の進歩によって、人間の雇用が脅かされたことはAIの登場が初めてのことでない。18世紀のイギリスでの第一次産業革命期ではこれまで家内工業が中心であったが機械化が進んだため、多くの人が機械に置き換わっていき解雇されていった。また、解雇はされないにしても機械化によって明らかに賃金が下がり、雇用数が減少していた。これは機械という技術が置換型技術であるためである。置換型技術とは人々に置き換わり、人間のスキルを不要にして、生産性を増加させる。このような状況が長く続き、ラッダイト運動という機械打ち壊し運動が各地で起こり多くの犠牲を出したが、約100年が経過し技術が補完型技術に変わっていった。補完型技術とは機械と人が互いに補い合う関係になり、スキルや賃金、雇用数を増加させる。つまりこの時代の人々は置換型技術の登場から補完型技術に変化するまでの約100年、機械化による犠牲を強いられたのである。

次にアメリカでの第二次産業革命期であるが、この時代もどんどん機械化が進んでいった。しかし、上記のような労働者が犠牲になるといったケースは少なかった。それはこの時代に登場した技術のほとんどが補完型技術であり、賃金や雇用数が増加していったためである。そして、中流階級の割合が増加していったことで、労働者の平均賃金が上昇傾向になり、豊かになっていった。

そして1980年頃からコンピューター化が進んでいき、工場の機械を自動で操作することが可能になっていった。つまり、コンピューターは置換型技術の傾向があり、中流階級の定型職の仕事を自動化し、雇用数を減少させたのである。また、コンピューターは弁護士やエンジニアなどの高いスキルが必要で自動化が困難である仕事と対人サービスや清掃員などのスキルが不要である仕事の需要を増加させた。つまり、スキルの差による賃金の格差が現れるようになっていったのである。

では、AI の進歩は人間の雇用にどのような影響を与えるのだろうか。AI の進歩により定型職以外にも様々な分野で自動化できる可能性がでてきた。また、スキルの有無による雇用の二極化が進む傾向があり、日本でもそのような状況が危惧されている。

そして、そのような雇用の二極化になるべく早く順応し、犠牲を最低限に抑える必要がある。そのためにもこれから必要になってくるスキルを身に着けるために STEM 教育、GIGA スクール構想、リカレント教育の普及が必要である。

英語論文

Pronunciation of [su] and [tsu] by Burmese Japanese Language Learners

高橋美玖（2 部英米文化学科 指導教員：米坂スザンヌ）

In recent years, the number of Burmese Japanese language learners has been increasing, and the number of Burmese living in Japan has also been increasing. One of the problems that Japanese language learners face in learning Japanese is pronunciation. Their inability to pronounce correctly can cause them to feel anxious about speaking with Japanese people or to have problems with Japanese people. There are various Japanese pronunciations that are difficult for Japanese language learners, but according to Deguchi and Masuko (2010), the most difficult Japanese pronunciation for Burmese Japanese language learners is the distinction between ス [su] and ツ [tsu], because [s] appears as a syllable-initial consonant in Burmese, but [ts] does not. In this study, the research question is: What is the difference between Burmese Japanese language learners who can distinguish between and pronounce ス [su] and ツ [tsu] and those who cannot?

In this study, the participants are 49 Burmese Japanese language learners (M=19, F=30) who can read *hiragana*. The JLPT levels of the

participants varied from N5 to N1. Some participants have never been to Japan before, while others have lived in Japan for more than five years. There are three instruments in this study: a demographic questionnaire, a pronunciation test, and a listening test. These tests are designed to measure if they can distinguish between ス [su] and ツ [tsu]. Google Form was used for the demographic questionnaire and the listening test, and Messenger voice message was used for the pronunciation test.

In the pronunciation test, the overall accuracy rate is 97% for ス [su] and 27% for ツ [tsu], with a large difference in accuracy rates. Comparing by JLPT level, the participants with higher JLPT levels have a higher accuracy rate in the pronunciation of ツ [tsu]. Also, comparing participants who have stayed in Japan and who have not, the accuracy rate of pronouncing ツ [tsu] is significantly higher for those who had stayed in Japan, $t(47)=2.6, p=.01$. In the listening test, the overall accuracy rate is 80% for ス [su] and 86% for ツ [tsu], with a slight difference in accuracy rates. Comparing by JLPT level, the participants with higher JLPT levels have a higher accuracy rate of hearing both ス [su] and ツ [tsu]. Also, comparing participants who have stayed in Japan and who have not, the accuracy rate of hearing ス [su] and ツ [tsu] is higher for those who have stayed in Japan, $t(47)=2.4, p=.02$. Regarding the correlation between the pronunciation test and the listening test, there was a weak correlation for ツ [tsu], $r=.43, p=.002$.

From these results, the study found that Burmese with a high JLPT level or who have stayed in Japan tend to be able to distinguish between ス [su] and ツ [tsu] and pronounce them. The JLPT is not a speaking test, but many Burmese who have the higher levels of the JLPT take it in order to study or work in Japan. Therefore, it is important for them to improve their pronunciation skills, which is why this result is important. Also, in the pronunciation test, there is a large difference between the accuracy rate of

ス [su] and ツ [tsu], with the accuracy rate of ツ [tsu] being very low. However, in the listening test, there is not a large difference between the accuracy rates of ス [su] and ツ [tsu], and both had high accuracy rates. This indicates that Burmese can distinguish between ス [su] and ツ [tsu], but they are not good at pronouncing ツ [tsu] correctly.

